

保育音楽論Ⅱ—『自己確認の喜び』を踏まえた指導方法と内容—

秋山 治子
(東京都足立高等保育学院)

《研究の目的》

今日迄の足掛2年間、研究と自己研修の目的で毎週、公立保育園へ通い、指導を続けてきた。保育音楽を外側からしか見ることのできない研究者の立場で、可能な限り幼児の視座に密着して保育音楽の在り方を探ろうとした。主たる狙いは、集団保育に於ける音楽指導を、純粹な音楽教育でなく、言わば音楽教育へ抜ける“馴染み”の期間のそれとして捕捉するという自らの考えを、経験的に抽出することである。本発表は、経過報告に停まった過去2回の『紀要発表』と異なり、一つの仮説と、それに基づく方法論を述べさせて頂く。

《研究の方法》

- 毎週一回、9時半頃、区立保育園に通い、10時より30分～1時間、5歳児クラスに対して音楽全般（歌唱、楽器、遊び）の指導を行う。（無報酬）
- 原則として筆者のピアノと歌で（楽器等は、園内の物を使用）指導を行うが、クラス担当の保育士～2名は必ず参加し、時には補助をして下さることもある。
- 園児の参加は強制せず、庭で遊びたい子、ホール内で見学する子、中途退出したい子は自由にしたが、全員参加が殆んどであった。尚、遊びの途中で入退室を気ままにする子供に対しては、注意を促した。
- 園側の要請のある時以外、定期的な反省会は行わず、担当保育士、園長との雑談は、ほぼ毎回行った。
- 次回訪ねる迄、予習復習は義務づけず、子供達の要望がある時には、日常の保育の中で、保育士が同じ歌や遊びをくり返した。園が計画する“今月の歌”等を、筆者の指導案中に特に組み入れることをせず、従って、保育園の音楽指導の“補充”という立場でなく、筆者独自の指導を行わせていただいた。

《考察と結論》——仮説『自己確認の喜び』及びそれを踏まえた指導方法と内容について

教科教育が導入される以前の就学前段階に於いて、集団保育に於ける音楽指導や音楽活動に求められることは、人間学的観点からは、音楽を通じた中広い人間形成であり、音楽教育的観点からは、音楽という領域に対する興味や希望の眼が大きく開かれることへの方向づけ及び音楽的技能獲得と言えよう。以上が個々別々でなく、総合的、統一的になされることが、幼児期

の音楽指導の理想的姿であろう。さて、これまでの実践経験から、歌唱、楽器の指導に関連した考察を進めながら、仮説に至る考え方を述べてゆきたい。

幼児は時として腹の底から、忘我的に大声を出して歌う。それが集団であれば、我も我もと大声を競い合うかのようである。声を張り上げて歌うことに対する否定的な先入観（この先入観は、“音楽⇒芸術⇒美”という一連の思考回路からか、それとも狭は“発達”する存在であり、それを助けるのが責務であるという大人の思い込みから起因しているのかはわからないが）から、幼児のこの状況に出会うと指導者は次の行急に移りがちである。即ち声を鎮めるよう指示したり諭したりする。筆者は、かような行急を否定するものではないが、前述の歌唱行動自体について、更なる考察の必要を感じるものである。音楽教育の面、日本語の言語構造の面、民俗学的な面、道徳的な面等、多角度からのアプローチが考えられるが、筆者は、幼児の心境、立場に立った基本的な面から経験論的に考えを進める。

私事で恐縮だが、歌好きだった筆者は幼児期、大声で歌うことが日課であったが、「そんなに大声を出すな、大人になって声が出なくなる」とたしなめられて以来、ヒョロヒョロ声の頭声発声に切りかえたことを記憶している。身に覚える限りでは、その行為には少くとも二つの目的があった。—①大声を出す気分の良さを味わう。②いかにしたら声が出し易くなるかの、いわば自己学習—。大声で歌う行為が、『それ自身のために行われ、それ自身が楽しみを与える活動である』（平林：心理辞典）とすれば、それは即ち遊びの概念にも通ずる。大人でも大声を出す、歌うことは楽しい。そこには原初的とも言える喜びが存在する。生活経験の浅い幼児は、大人より更に直感的に自分自身を体験する喜び、自己を認識する喜びを味わっているのではなからうか。まして単なる大声の発声ではなく、旋律を歌えるということとは、幼児にとって自己実現の喜びでもあろう。

歌に劣らず幼児が好むものは楽器である。ここでも“大声で歌う”と同様のこと（遊びと自己学習）が見出せる。幼児は楽器を触る、持つ、音を出すということに大きな喜びを表わす。棒切れをたたくだけでも嬉しいと感じる幼児にとって、楽器を鳴らそうというこ

とは、自己の存在を直感的に感得する程の大きな喜びであろう。自身の身体を使って楽器を鳴らす行為から得られる、驚きに似た喜びの感覚は、人生に対する肯定的な姿勢を育てるプラスの刺激となって、自己の存在の確信へと導く。

以上述べた、原初的な快の感覚は、幼児の人間形成、と情操発達にとって、重要な契機であると受けとめ、これを名付けて「自己確認の喜び」(『喜び』と略す)とし、集団保育の音楽指導に於いてこれを大切に見守る考え方を提起したい。『喜び』は、羞恥や劣等意識等の複合感情から惹起されるところの緊張感や恐怖心の下では感受され難い。それ故、その感情を生ぜしめない、又は解消できる指導方法が要求される。筆者は“遊び”の形態を採ることが望ましいと考える。何故なら、“遊び”に於いては、そこに現われる能力較差が、劣等感等として自覚されにくい点である。一つの形態を大人から与えられるという点で、自発的な遊びとは当然異なるが、指導方法で、純粋な遊びに近づけることは可能であろう。例えば楽器について言えば(幼児が親しむのは主として無音程打楽器であるが)トライアングルは元より、鈴でさえ緊張で手指が硬直する。一方、心の中は興味と関心で溢れている。この時、“好きなように鳴らしていいよ”と言いながら、すぐ正しい奏法を教え込もうとしたり、制止させたりすることは、“下手だ”と言うことと同じであろう。幼児は、「この先生は皆の前で評価につながる言動をしないか、心から導いてくれるか」ということを、敏感に感じとる。奏法にこだわらずに音を出させてもらえる、リズムに乗れなくてもいいのだ、という安心感、信頼感を抱く時、幼児は心から楽しむ。即ち、遊び、自己学習する。

(表層的な捉え方ではあるが、ピアノは、最初の音を出すに至る試みや苦労の段階が少い楽器であるが故に、ピアノが弾ける＝音楽指導力有能、とする考え方は、一顧を要するのではないかと考えるがどうだろうか。)

ところで、能力が到達しない課題や対象に対しては、人間は概して興味を沸かさない。困難を感じさせる難しい遊びをしたのでは、幼児は楽しまない。とば言え、かけ離れて高次や低次の内容でない限り、幼児は大体において拒絶しないが、筆者は、歌や楽器が遊びの中にとり入れられる「音楽遊び」という一方法を考え、実践している。(雑誌に掲載中)そこに使う教材は、なるべく日常歌う幼児歌唱曲や、教え伝えたい昔の童謡などとする。

《音楽遊びの実践例》

『北風小僧の寒太郎』(嵯隆夫詞、福和利作曲)を紹介すると、

歌を覚えた後、円陣に坐って自分の位置を覚えておき、曲の前半を歌う。歌唱部分9小節目“ヒューン”から最後までを歌いながら全速力で自由に駆け回り、次の曲の冒頭までに元の位置に戻り、以上をくり返すことを約束して遊ぶが、拍節リズムがよく身につけていない子供でも、(幼児とリズムに関しては今後の課題)曲の終りにはピッタリと元の位置に戻ることができ、楽しんで歌い、遊んでいるのである。

楽器を扱った「バスごっこ」(山本三詞、山本昭作曲)を紹介すると、(これは、楽器に親しむことと、乱暴に扱うことの違いを教える遊びでもあるが、)歌唱部分5～8小節“おとなりへ、ハイ、”の箇所で、楽器の音をたてないように、そっと隣の人へ渡してゆくが、子供の様子を見ながら、その部分だけを自由リズムにしてピアノを弾いたり、ピアノのテンポに合わせたり、応用をきかせながら遊ぶと、幼児が何回も楽器を手に持つ機会が得られ、楽しむうちに自然と、楽器に対する違和感も解消され、次の段階への移行がスムーズになる。

又、歌唱教材は使わないが、園内の全ての楽器を一種類ずつ並べて、一人一人が好きな楽器を選んで“返事”をする「楽器で挨拶」の音楽遊びでは、(改めて発表する機会を得たいと考えているが)親しみ易い楽器からめづらしい楽器へ、関心が移ってゆく幼児の心境の変化や、男・女児の楽器嗜好の傾向等も副産物として観察できる遊びであり、楽器指導のあり方について、改めて考えさせられる遊びでもある。

以上で、『喜び』を踏まえた「音楽遊び」を紹介したが、遊びの中で幼児が、歌うこと、又は楽器を鳴らすことに、如何に夢中になるか、を実証する為には、更に詳細な実践論を加えなくてはならないと思う。本発表では、仮説の提起にとどめさせていただき、考察の不充分な問題点と音楽遊びの分類については、既に述べたように、今後の課題とさせていただきたい。最後に、音楽遊びについての大きな区分けを記す。

- ・歌唱教材を歌いながら遊ぶもの。
- ・歌唱教材を歌いながら、楽器を鳴らして遊ぶもの。
- ・歌唱教材を歌わずに、ピアノを聴きながら遊んだり、楽器を鳴らしたりするもの。
- ・歌唱教材を使用しないもの。
- ・歌唱教材の拍節リズムを強調して遊ぶもの。
- ・歌唱教材の拍節リズムを強調せずに(しかし拍節感はずさずに遊ぶもの。
- ・歌唱教材の拍節リズムの枠をとり除いて、自由リズムを導入して遊んだり、楽器を鳴らしたりするもの。